

最初の「士師」オトニエル

山 吉 智 久

Tomohisa YAMAYOSHI

目次

はじめに

1. テキスト
2. 文学的構成
3. 綱領部分(2:11-19)なら
びに各士師の枠部分との
比較
4. 固有部分の考察
おわりに

[Abstract]

The First 'Judge' - Othniel

The story of Othniel (Judges 3:7-11) was composed by the Deuteronomist not only in terms of its schematic framework but also in its finer details. It is not to be assumed that there once existed an independent tradition regarding his work. At the beginning of the series of judges, the Deuteronomist has used the figure of Othniel found in the tradition of Caleb in Joshua 15, so as to introduce a person related to the tribe of Judah. This is in contrast to the rest of the 'judges', who all came from the northern tribes. At the same time, in referring to the relative of Caleb, a contemporary of Joshua, the continuity is established between the time of Joshua and the 'judges'.

はじめに

旧約聖書の『士師記』は、イスラエルの民によるカナンへの定住から王国の成立に至る以前の時代における彼らの歩みについて記したものである。この文書の大枠は、学術的に「申命記史家」(Deuteronomist)と呼ばれ慣わされる人々の手による編集によって形成されたと見られる。彼らは、「士師」(ショーフェート, שופט/šōpēṭ, 士2:18, 19, 11:27)と呼ばれる民の指導者的な人物たちについてのいくつかの物語伝承を軸に据えつつ、これらに一連の定型的な表現からなる導入定式ならびに締め括り定式を付すことで、それぞれの物語に枠付けを行い、それらを配列することに

よって、ある一貫した脈絡のある叙述に仕上げたと考えられている¹⁾。

現行の『士師記』には、「士師」として計12人の名が挙げられている。オトニエル(3:7-11)、エフド(3:12-30)、シャムガル(3:31)、デボラとバラク(4-5章)、ギデオンの息子アビメレクを除く)。本稿は、これらの「士師」の内、最初に登場するオトニエルに着目する。オトニエルについて述べられた『士師記』3章7-11節の分析を通じて、申命記史家による編集の痕跡を精査し、本記述が生まれ

キーワード：旧約聖書, 『士師記』, 申命記史家, オトニエル

Key words: Old Testament, Book of Judges, Deuteronomist, Othniel

るに至った背景ならびに経緯の再構成を試みる
こと、それが本稿の目的である。

1. テクスト

『士師記』3章7-11節の詳しい分析のために、まずはマソラ本文(BHS)²⁾の日本語訳テキストを示す。本箇所のマソラ本文は、比較的よく保持されており、本文批評上の問題はさほど多くないが、文法的、語彙的な説明と併せて、その都度、訳注にて論じる。

翻訳

⁷イスラエルの子らは、ヤハウエの目に悪を行った。彼らは、彼らの神ヤハウエを忘れた。彼らは、バアルたちに、またアシェラたち^{a)}に仕えた。⁸ヤハウエの怒りが、イスラエルに対して燃えた。かれは、彼らをアラム・ナハラタイム^{b)}の王クシャン・リシュアタイムの手に売った。イスラエルの子らは、クシャン・リシュアタイムに8年仕えた^{c)}。⁹イスラエルの子らは、ヤハウエに叫んだ。ヤハウエは、イスラエルの子ら^{d)}のために救助者を立て、彼は彼らを救った^{e)}。ケナズの子、カレブの兄弟、その内の小さい方^{f)}のオトニエルを^{g)}。¹⁰ヤハウエの霊が彼の上にあり、彼はイスラエルを裁いた。彼が戦いに出ると、ヤハウエはアラムの王クシャン・リシュアタイムを彼の手に与えた^{h)}。彼の手は、クシャン・リシュアタイムに対して力強かった。¹¹この地は40年ⁱ⁾、平穏であった。こうして、ケナズの子オトニエルは死んだ。

13, 10:6, サム上7:4, 12:10など。なおベシッタやウルガタも参照)。この「アシュタロト」という読みは、士2:13, 10:6に合わせたものと考えられ、マソラ本文を読み替えるべき根拠とはならない³⁾。七十人訳では、「アルソスたち」(ἄλσοςの複数形)⁴⁾。

^{b)} 七十人訳では、「(2つの) 大河の(間の) シリア」⁵⁾。

^{c)} 七十人訳(アレクサンドリア写本)ならびにウルガタでは、「彼らは彼に仕えた」⁶⁾。直前に出る固有名詞の繰り返しを忌避したものと思われる。

^{d)} 七十人訳では、「イスラエル」で⁷⁾、「子ら」(υἱοί)を欠く。8aβ.10節ααの「イスラエル」に合わせるための変更か。

^{e)} 動詞「救った」の主語である3人称男性単数形は文法上、「ヤハウエ」とも「救助者」とも解し得る。試訳は、2:16の並行表現を参考に、「救助者」を主語と見なす。

^{f)} 「その内の小さい方」(מִן־הַקְּטָנִים/haqqāṭōn mimmənnū)は、士1:13におけるオトニエルの説明にも見られる表現。しかし、これと並行し、オトニエルの名が旧約中、最初に出るヨシュ15:17のマソラ本文では、この表現を欠く。

^{g)} 体格標識(nota accusativi)と共に出る「オトニエル」は、動詞「立てる」(קָמַן/qm hif.)の目的語で、構文上、前出の「救助者」の同格であるが、動詞「救う」(יָשָׁע/yš' hif.)の後に置かれており、その位置が不自然⁸⁾。エフドの場合にも同じような構文が見られる(士3:15)他、名前を後置することによる強調が意図されているとも考え得る(創22:2など参照)⁹⁾。

^{h)} 「手に与える」という表現は、士3:28, 4:7.14, 7:9.15, 18:10, 20:28などにも見られ、G. フォン・ラートによれば、古代イスラエルにおける「聖戦」を構成していた一要素¹⁰⁾。ここでの「手」(יָד/yād)は、支配や勢力を象徴的に表す¹¹⁾。

ⁱ⁾ 七十人訳(アレクサンドリア写本)では、「50年」¹²⁾。

2. 文学的構成

『士師記』では、3章1-6節において、ヤハウエがイスラエルを試みるために住まわせた近隣諸国民の一覧が示され(1-4節)、彼らの内に住んだイスラエルの子らがヤハウエから離反して異教神崇拜に走ったことが語ら

訳注

^{a)} マソラ本文は、אֲשֵׁרָה/ʾāšērāh「アシェラ」の稀有な複数形であるאֲשֵׁרוֹת/ʾāšērôt(一般的にはאֲשֵׁרִים/ʾāšērīm)。旧約中の用例は、本箇所以外、代下13:3, 19:3のみ。2つの写本では、אֲשֵׁרֹת/ʾāšērôt「アシュタロト」(士2:

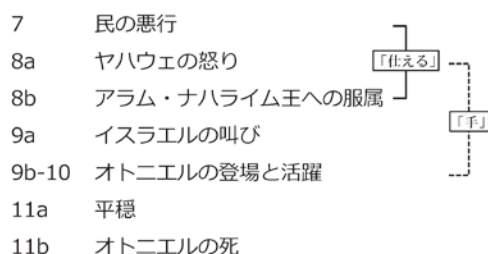
れる（5-6節）。その後の3章7節には、「イスラエルの子らはヤハウエの目に悪を行った」という一文が来る（2:11参照）。これとほぼ同じ文が、3章12節にも繰り返されている（更に、4:11, 6:1, 10:6, 13:1も参照）。すなわち、イスラエルの民によるこの悪とされる行為が、その後に生起する一連の出来事の契機であると同時に、その様子について述べる物語の導入となっていることが分かる。従って、この表現が出る3章7節と12節に挟まれた7-11節が、一つの文学的なまとまりを構成していると思ふことができる。

本単元で語られるのは、ケナズの子オトニエルが最初の「士師」として登場、活躍した様子についてである。この3章7-11節における構文上の特徴として、いずれの文も *wa=yiqtol* 形（ワウ未完了継続形）による、いわゆる叙述文で組み立てられている¹³⁾。それぞれの文を構成している主語ならびに述語を列挙すると、次のようになる。

節	主語	述語
7	イスラエルの子ら	——行ふ、忘れる、仕える
8aα	ヤハウエの怒り	——燃える
8aβ	かれ（ヤハウエ）	——売る
8b	イスラエルの子ら	——仕える
9aα	彼ら（イスラエルの子ら）	——叫ぶ
9aβ	ヤハウエ	——立てる
9aγ	彼（救助者）	——救う
10aα	ヤハウエの霊	——ある
10aβ.γ	彼（オトニエル）	——裁く、出る
10aδ	ヤハウエ	——与える
10b	彼（オトニエル）の手	——強い
11a	この地	——平穏である
11b	オトニエル	——死ぬ

本単元における文章の主語として出るのは、11節 a の「この地」を別にすれば、「イスラエルの子ら」（7.8b.9節 αα）、「ヤハウエ」（8a.9aβ.10節 ααδ）, ならびに「救助者」としての「オトニエル」（9aγ.10aβ.γ.10b.11節 b）の3つであることが分かる。こうした主語の転換も考慮に入れつつ、『士師記』3章7-

11節の文学的な構成をまとめると、以下のようになる。



本単元を導入しているのは、イスラエルの民の悪行である。ここには、彼らがヤハウエを「忘れ」、他の神々に「仕えた」との説明が含まれる（7節）。それによって引き起こされたのがヤハウエの怒りであり、神は民をアラム・ナハラタイムの王クシャン・リシュアタイムの手に「売る」（8節 a）。彼らはそれゆえ、この王に8年の間、「仕える」ことを余儀なくされたという（8節 b）。この「仕える」（*בד*/*bd*）という動詞は、先の7節において、民が他の神々を崇拝したことを表す際にも用いられていた。同じ動詞を、主語を同じくして、目的語を変えて繰り返すことによって、イスラエルの民がヤハウエでなく他の神々を崇拝することが、他国の王に服属する結果を自らに招くことになるという構図が際立たされている¹⁴⁾。

こうした状況に陥ったイスラエルは、——8年後になってはじめてか、あるいは8年間にわたって——叫びを上げる（9節 a）。するとヤハウエは、救助者たるオトニエルを「立て」、彼は民を「救った」とされる。オトニエルはイスラエルを「裁き」、アラムとの戦いに勝利したというのである（9b-10節）。本段落に出るオトニエルの「手」（*יָד*/*yād*）は、前出8節 a にあるヤハウエがイスラエルの民を敵対者の「手」に売ったという表現と呼応している。

本単元を締め括っているのは、この地が40年の間、平穏であったとの記述（11節 a）、そしてオトニエルが死んだことの報告である

(11節b)。

本單元には、登場人物によるセリフが一切なく、出来事の推移のみがごく簡潔に述べられている。イスラエルを苦しめた敵の抑圧がどのようなものであったか、イスラエルに平穏をもたらしたというオトニエルによる救助や裁きがどのように行われたのかなど、個々の場面についての詳細な描写を欠いている点も、本单元の特徴と言えよう。

3. 綱領部分(2:11-19)ならびに各士師の粹部分との比較

オトニエルは、『士師記』において具体的に名の挙げられる「士師」の中で、最初に登場する人物である。彼について語る3章7-11節の文言は、「士師」時代の概要をまとめた先行の2章11-19節の綱領部分と多くの点で共通する。共通部分の一致度合いは、個々の言い回しにまで至り、それらは次のように一覽で表される¹⁵⁾。

3:7-11	2:11-16
7節: וַיַּעֲשׂוּ בְנֵי־יִשְׂרָאֵל	11節: וַיַּעֲשׂוּ בְנֵי־יִשְׂרָאֵל (A)
אֶת־הָרַע בַּעֲנֵי יְהוָה	אֶת־הָרַע בַּעֲנֵי יְהוָה
וַיַּעֲבְדוּ אֱתֵּי־הַבְּעָלִים	וַיַּעֲבְדוּ אֱתֵּי־הַבְּעָלִים (B)
8節: וַיַּחֲרֹאֲף יְהוָה	14節: וַיַּחֲרֹאֲף יְהוָה (C)
בְּיִשְׂרָאֵל	בְּיִשְׂרָאֵל
וַיִּמְכְּרֻם בְּיָד	וַיִּמְכְּרֻם בְּיָד (D)
9節: וַיִּקֶּם יְהוָה מוֹשִׁיעַ	16節: וַיִּקֶּם יְהוָה שֹׁפְטִים (E)
וַיּוֹשִׁיעֵם	וַיּוֹשִׁיעֵם

(A) 3:7a=2:11a

「イスラエルの子らは、ヤハウェの目に悪を行った」。

(B) 3:7b=2:11b

「彼らは、バアルたち」などの異教の神々に「仕えた」。

(C) 3:8a=2:14a

「ヤハウェの怒りが、イスラエルに対して

燃えた」。

(D) 3:8b=2:14b

ヤハウェが、敵の「手に彼らを売った」。

(E) 3:9b=2:16

「ヤハウェが、救助者／士師たちを立て、彼／彼らが、彼らを救った」。

これらの内、(A) 民の悪行と (D) 敵への売渡については、その後のすべての「大士師」の導入部分(3:12,13, 4:1,2, 6:1 10:6,7, 13:1), (B) 異教神崇拜ならびに (C) ヤハウェの怒りは、エフタ(10:6,7), (E) 士師の起こしはエフドの物語にも登場する(3:15)¹⁶⁾。これらの表現は、逐語的な一致を示すだけでなく、それぞれが登場する順序も共通している。

本單元には更に、上の一覧には含まれないものの、各士師の粹部分と共通する要素として、以下のものがある。

(a) 敵への服属とその期間(3:8b)

3:14(エフド), 4:3(デボラ), 6:2(ギデオン), 10:8(エフタ), 13:1(サムソン)

(b) 民の叫び(3:9a)

3:15(エフド), 4:3(デボラ), 6:6(ギデオン), 10:10(エフタ)

(c) 敵の屈服(3:10a)

3:30(エフド), 4:23-24(デボラ), 8:28(ギデオン), 11:33(エフタ)

(d) 士師の裁き(3:10a)

4:4(デボラ), 10:2(トラ), 10:3(ヤイル), 12:7(エフタ), 12:9(イブツァン), 12:11(エロン), 12:13-14(アブドン), 15:20, 16:31(サムソン)¹⁷⁾

(e) 地の平穏(3:11a)

3:30(エフド), 5:31(デボラ), 8:28(ギデオン)

(f) 士師の死去(3:11b)

4:1(エフド), 8:32(ギデオン), 10:2(トラ), 20:5(ヤイル), 12:7(エフタ), 12:11(イ

ブツァン), 12:12(エロン), 12:15(アブドン)

以上のことから、『士師記』3章7-11節のオトニエルについての記述は、そのほぼすべてが2章11-19節の綱領部分ならびに各物語の枠部分に共通して見られる表現によって組み立てられていることが分かる。イスラエルが犯した悪行が発端となって、神ヤハウェによる怒りと、敵への売渡という形で災いがイスラエルに襲い掛かる。しかし民が叫びを上げると、ヤハウェは救助者たる士師を彼らのために立てることによって、この危機から救う。『士師記』において繰り返されるこの図式は、「申命記史家」がイスラエルの民の歩みの中に見出した歴史の法則であった。オトニエルの物語の筋書は、この「申命記史家」による「循環的定式」の図式に則った典型例である¹⁸⁾。

4. 固有部分の考察

本単元の記述は、大部分が「申命記史家」の手に帰される定型的な表現からなるが、この物語に固有の事項もいくつか見られる。それらの由来を見定めることが更なる課題となる。

a. ヤハウェを忘れる

本単元では、イスラエルの子らによる悪行の説明として、彼らが神ヤハウェを「忘れた」(נָסַח/*skh*)と言われる(3:7)¹⁹⁾。『士師記』において、同じ文脈で多く見られる動詞は、「見捨てる」(נָזַח/*zb*)であり(2:12-13, 10:6, 10:13)。「忘れる」は、『士師記』では、本箇所にも見られる表現である。

イスラエルがヤハウェを「忘れた」という批判は、『ホセア書』に初めて見られ²⁰⁾、その後『エレミヤ書』²¹⁾や『申命記』ならびに申命記史書に取り入れられている²²⁾。それらの箇所におけるヤハウェ忘却は、神による

イスラエルの民のエジプト脱出の回顧、神との契約締結など対比される形で挙げられている。そこには、民による神ヤハウェの過去の行為に対する信頼の喪失を表すと共に、故意に神を蔑ろにする行為、神との間に築かれた共同体の破壊といった側面が含まれる²³⁾。とりわけ『申命記』6章と8章、『サムエル記上』12章、『列王記下』17章の文脈では、民によるヤハウェの忘却が、彼らの異教神への崇拝と結び付けられている。加えて『サムエル記上』12章は、サムエルによる「士師」時代の回顧になっている。

本箇所における「ヤハウェを忘れる」という表現は、これらの箇所と同様、「申命記史家」の手によるものと見て差し支えないだろう²⁴⁾。

b. アシェラたち

綱領部分の2章11, 13節やエフタ物語の導入部分の10章6節と同じく、本単元でも民の悪行は他の神々への崇拝と結び付けられている(3:7)。これら3つの箇所すべてにおいて名が挙げられているのが、「バアル」であり、本単元では、それと並んで「アシェラ」が挙げられている(2:13, 10:6 [およびサム上10:6] では「アシュタロト」)。

「アシェラ」(אֲשֵׁרָה/*ʾašerah*)は、フェニキア・カナンの宗教で広く崇拝された豊饒女神である²⁵⁾。ウガリト文書では至高神エルの、カナン宗教においては豊饒神バアルの配偶女神とされた。旧約聖書では、「アシェラ」の語は, נָטַע/*ntʿ*「植える」(申16:25), שָׂרַף/*šrp*「燃やす」(王下23:6), שָׂם/*šym*「置く, 据える」(王下21:7), שָׁבַר/*šbr* pi「壊す」(出34:13, 申7:5), כָּרַת/*krt*「切り倒す」(士6:25以下)などの動詞と結び付いて用いられており、直立した木製の祭具を表した。北イスラエル王国の民(王下17:10), また歴代の王たちの内、ヤロブアム(王上14:15), レハブアム(王上14:23), アハブ(王上16:33), ヨアハズ(王

下13:6), マナセ (王下21:7) による「アシェラ」の建立が批判され, アサ (王上15:13), ヒゼキヤ (王下18:4), ヨシヤ (王下23:6) はこれを破壊したとして肯定的に評価されている。

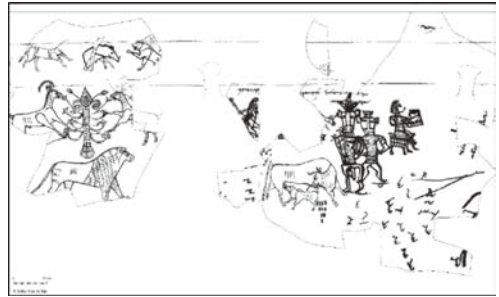
但し, 本箇所において, 「バアル」と「アシェラ」はいずれも抽象化ならびに一般化を表す複数形で表現されており²⁶⁾, それぞれ男神と女神の総称として挙げられているものと考えられる²⁷⁾。従って, この記述の背後に, 何らかの具体的な異教神祭儀を想定することはできない²⁸⁾。

【付論】ヤハウェとかれのアシェラ

古代イスラエルにおける実際のアシェラ崇拝を伺わせる史料として注目を集めているのが, クンティレット・アジュルドならびにヒルベト・エル・コムで発見された碑文である²⁹⁾。

クンティレット・アジュルド (Kuntillet 'Ajrud, ヘブライ語名 Horvat Teman) は, ネゲブ砂漠にあるエジプトとイスラエルの国境地帯, 死海とアカバ湾のほぼ中間地点に位置し, ガザから南に延びる隊商ルート上, カデシュ・バルネアから約50km南方にある遺跡である。自然の要害上に建てられたこの城塞跡は, テル・アヴィヴ大学のZ. メシェル (Meshel) 指揮の下, 1975-1976年に計3回の発掘が行われた。発掘は地表に露出している建物を掘り出すことに集中されたため, 層位的な検証が不可能であるが, およそイスラエルのヨアシュ王の時代, 前800年頃と年代付けられる。

この遺跡からは, ピトス (貯蔵壺) や石製容器, 漆喰壁に記された数多くの碑文が見つかっている。建物Aから出土したピトスAの側面には, さまざまな図像が描かれている (図表1参照)。2頭の動物 (アイベックス) が1つの木に向き合う形で配された, いわゆる「生命の木」の図像, また牛頭を持つベス神が2体並んで描かれている。その上方部分には, 次のような2行の碑文が赤色のインクで書かれている³⁰⁾。



図表1 クンティレット・アジュルド出土の碑文 (ピトスA)

- 1 言った, [...] ……は, ……「言え, ヤーヘリー^{a)}に, そしてヨーアサー^{b)}に, そして […]」に, 『私はあなたたちを祝福した^{c)}。
- 2 サマリアのヤハウェに, そしてかれのアシェラに』。

a) 語根 hll/hll 「輝く」ないし「賛美する」に由来する人名。

b) 前7世紀の印章にも用例がある人名。

c) 「あなたたち」は, 前掲の人々を指すと見られる。この語句が書かれた破片は, その前の部分と直接は接合せず, 破片の上方に刻まれた横線の位置関係から, おおよそのスペースが割り出される。

同じく建物Aから見つかったピトスBにも, いくつかの図像が描かれている。とりわけ目を引くのは, 両手を上げた5人の人物たちである。このピトスBには複数の碑文が確認できる (図表2参照)。中でも注目に値するのが, 一連の人物たちの右側に配された10行の碑文である。

- 1 言った,
- 2 アマルヤウ^{a)}は,
- 3 「言え, わが主^{b)}に。
- 4 『元気ですか, あなたは。
- 5 私はあなたを祝福した。
- 6 テマン^{c)}のヤハウェに,
- 7 そしてかれのアシェラに。
- 8 かれが祝福し^{d)}, あなたを守るように。

9 かれがわが主と共にいるように』」。

10 ……………

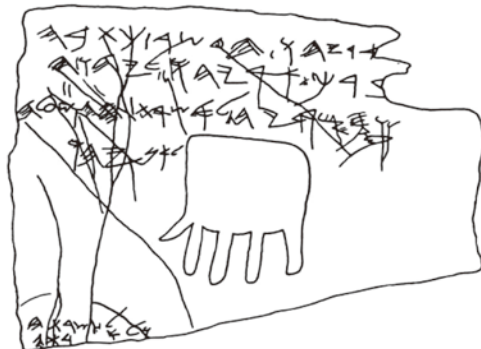
- a) 語根 mr/mr 「言う」 にヤハウエの一部が組み合わされた人名（代上19：11, 24：23, 31：15参照）。
- b) 固有名が挙げられておらず、この「わが主」が誰のことを指すか定かではない。
- c) テマンはエドムの主要都市ないし領域。しばしばエドムと並んで挙げられ（エレ49：7.20, エゼ25：13）、ヨブの友人エリファズは、この地の出身とされるが（ヨブ2：11）、場所の同定はできていない。そもそもテマンが町を表すのか、あるいは地域を指すのかも定かではない。
- d) あるいは、2人称単数男性の接尾辞が語末のカフと同化したと考え、「かれがあなたを祝福するように」と訳すことも可能。興味深いことに、主語は複数形（ヤハウエとかれのアシェラ）ではなく、単数形（ヤハウエ）になっている。



図表2 クンティレット・アジュルド出土の碑文（ピトスB）

またヒルベト・エル・コム（Khirbet el-Qom）は、ラキシユとヘブロンのはぼ中間地点、テル・ベト・ミル跡の北北東9kmのユダの丘陵地に位置する遺跡である。1967年、W. G. デーヴァー（Dever）指揮の下、エルサレムのヘブル・ユニオン・カレッジによって発掘が行われた。この発掘により、鉄器時代の二つの墓（墓IとII）が、多数の鉄器時代の土器や物品と共に出土してい

る。そこからは更に、前8世紀の終わり頃に年代付けられる碑文が、計3点発見されている。その内、墓IIで発見されたのが、次の碑文3である（図表3参照）³¹⁾。



図表3 ヒルベト・エル・コム出土の碑文3

- 1 ウリヤフー^{a)}、富豪^{b)}がこれを書いた。
- 2 ウリヤフーがヤハウエに祝福されるように。
- 3 そしてかれは、彼の敵から^{c)}、かれのアシェラによって^{d)}彼を救った。
- 4 オニヤフー^{e)}によって。
- 5 そしてかれのアシェラによって。
- 6 […………] そしてかれのア[シ]エラによって。

a) 「ヤハ（ウエ）は（わが）光」を意味する人名（エレ26：20-23）。なお、サム下11：3-26, 12：9-10.15, 23：39, 王下16：10-16, イザ8：2, エズ8：33, ネヘ3：4.21, 8：4に出る人名ウリヤも参照。

b) 「金持ちな」、「富豪」（エレ9：22, ミカ6：12, 箴18：10, ヨブ27：19, コヘ5：11, 10：6.20など）。

c) 文字がW W M M \$ [?] \$ R R Y Y H Hとすべて二度書きされている。

d) 左隅の5, 6行目に、同一表現が繰り返されている。

e) 「ヤハウエはわが力」を意味する人名。

クンティレット・アジュルドならびにヒルベト・エル・コム出土のこれらの碑文には、神ヤハウエによる祝福の定式が見られ、このヤハウエと並んで、「かれのアシェラ」との言及がある。

この「アシェラ」の意味をめぐっては、これがある一つの独立した女神、すなわちヤハウエの配偶神としての女神を表しているのか、それともヤハウエの様式化された木製の祭具を指しているのか意見が分かれる。ヘブライ語においては原則として固有名詞に人称接尾辞は付かないこと、またクンティレト・アジュルド出土のピトスB上の碑文8-9行目で、続く動詞の主語が単数形であることに鑑みるに、後者の意味で解する方が妥当性は高いと思われる。

いずれにせよ、これらの碑文資料は、古代イスラエルにおけるヤハウエー神教の実情の一端を伝えるものとして、きわめて貴重である。

c. アラム・ナハラタイムの王クシャン・リシュアタイム

本単元において、イスラエルが服従を強いられたのは、「アラム・ナハラタイムの王クシャン・リシュアタイム」であったと言われる(3:8, なお10節では、「アラムの王」とされる)。

この王の支配地域とされる「アラム・ナハラタイム」は、古くはアレppoからハブルまでのユーフラテス川流域を指し、後にシリアにまで拡大された地域であり、王国時代中頃から、パレスチナに侵攻を繰り返したアッシリアや新バビロニアの軍勢の拠点であった(用例は他に、創24:10, 申23:5, 詩60:2, 代上19:6)³²⁾。すなわち、北メソポタミアという地理的にパレスチナから非常に遠く離れた場所である。

これに対して「クシャン・リシュアタイム」という王の名前は、連語形連結によって構成された稀有なものである³³⁾。被支配名詞(Nomen regens)の「クシャン」(כּוּשָׁן/*kūšan*)は、本箇所以外に『ハバクク書』3章7節に見られ、そこではミディアンと並行して遊牧民の部族として登場する。この語は更に、エジプト南方の「クシュ」の地を想起させる³⁴⁾。いずれにせよ、この語は、王の支配地域とされる北メソポタミアとは対極にあ

るミディアン南方を示唆している³⁵⁾。

一方の支配名詞(Nomen rectum)の「リシュアタイム」(רִישׁוֹאִימִי/*riš'atayim*)は、「悪」ならびに「罪」を意味する名詞רִשָּׁא/*reša'*の双数形で、「二重の悪」といった意味合いを持つ。『創世記』14章2節に出るソドムの王ベラア(בְּרָעָא/*baera'*、「悪の中に」の意)やゴモラの王ビルシャア(בִּרְשָׂא/*birša'*、「罪の中に」の意)などと同じく、多分に象徴的な意味が込められた語である³⁶⁾。この語形は更に、先の「ナハラタイム」と韻を踏んでいる(*naharāyim - riš'atayim*)³⁷⁾。

この王の名前を、外国語の語音転換と考え、周辺諸国(フリ、ヘト、エジプトなど)の中から似たような音の人物の名を探し出そうとする試みは³⁸⁾、いずれも成功していない。この名前が示唆するのはむしろ、イスラエルに対するあらゆる攻撃が「罪」ないし「悪」によってもたらされるということであり、その背後に、ある確固たる伝承を見出すことはできない³⁹⁾。

d. ケナズの子、カレブの兄弟オトニエル

イスラエルの子らのために救助者として、神ヤハウエによって立てられた最初の「士師」とされるのが、「オトニエル」(עֹתְנִיֵּאל/*'otni'el*)という名前の人物である(3:9)。オトニエルは、עֹתָן/*'oten**という語に、「神」を表すאֵל/*'el*が組み合わせされた、神名要素を含む人名(theophoric name)であると考えられるが、最初のעֹתָן/*'oten**の語義は不確かである。アラビア語'*atana*「力強い」⁴⁰⁾からの類推で、「神は(わが)力」、あるいはアモリ語'*h̄m*⁴¹⁾やアッカド語'*h̄atanu*「守る」⁴²⁾からの類推で、「神は(わが)守り」などを意味すると想定される⁴³⁾。

このオトニエルは、『士師記』1章13節で既に登場しているが、『士師記』1章10-15節は、『ヨシュア記』15章13-19節に個々の言い回しに至るまで並行する記述があり、こ

れを基に申命記史家よりも後の時代になって付け加えられたものであると考えられる⁴⁴⁾。そこでは、オトニエルがキルヤト・セフェルの地を撃ってこれを奪取し、カレブの娘アクサを妻とした人物として描かれている。

¹³ヨシュアへのヤハウエの命令によって、彼はエフネの子カレブに、ユダの子らの真ん中の部分、アナクの父キルヤト・アルバを与えた。それはヘブロンであった。¹⁴カレブはそこから、アナクの3人の子ら、シェシャイ、アヒマン、タルマイというアナクの生まれの者たちを追い払った。¹⁵彼はそこから、デビルの住民たちのもとに上った⁴⁵⁾。デビルの名はかつて、キルヤト・セフェルだった。¹⁶カレブは言った、「キルヤト・セフェルを撃ち、これを奪取する者、私はその者に、わが娘アクサを妻として与えよう」。¹⁷ケナズの子、カレブの兄弟⁴⁶⁾のオトニエルがこれを奪取した。彼（＝カレブ）は彼に、彼の娘アクサを妻として与えた。¹⁸彼女が出かけるときのことである。彼女は彼に、彼女の父から野を求めるよう促し、ろばの上から降りた。カレブは彼女に言った、「お前、どうした」。¹⁹彼女は言った、「私に祝福を与えてください⁴⁷⁾。あなたは私にネゲブの地を与えてくださったのですから、私に水の泉を与えてください」。彼⁴⁸⁾は、彼女に上の泉と下の泉を与えた。

カレブは、カナンの地を偵察するためにユダ部族から遣わされたエフネの子で(民13:6)、ヌンの子ヨシュアと並んで「ヤハウエに従った」ために、約束の地を見ることができると言われた人物である(民14:30, 申1:36)。

『士師記』2章10節によれば、「士師」の時代は、ヨシュアや彼と同世代の人々が死に絶えた後のことになっているものの、本単位ではカレブとの関わりがある人物が登場することによって、そこにヨシュア時代との密接な結び付きが生まれている。

オトニエルは、「ケナズの子」で、「カレブの兄弟」であったとされている。『士師記』1章13節と3章9節では更に、「その内の小さい方」、すなわちカレブの弟であったことを説明する文言が加わる。これは、オトニエルがカレブよりも長生きしたこと、あるいは姪と結婚するのに年老いすぎていなかったことを説明しようとしたものかもしれない。しかしそれ以上に、オトニエルが、ヨシュアやカレブとは異なる、ヤハウエがイスラエルに行った業を知らない新しい世代に属していたことを強調しようとするものであろう⁴⁹⁾。

オトニエルとカレブとの間の関係について混乱を招くのは、カレブは、「エフネの子」(民13:6, 14:6.30.38, 26:45, 34:19, 申1:36, ヨシュ14:13, 15:13, 21:12, 代上4:15, 6:41), 「ケナズ人エフネの子」(民32:12, ヨシュ14:6.14)と呼ばれる一方で、オトニエルのように「ケナズの子」とは一度も呼ばれていないことである。加えて厄介なのが、『歴代誌上』4章の記述である。そこではまず13節において、ケナズの子らが挙げられており、その中にオトニエルが含まれる。その後15節になってはじめて、エフネの子カレブが挙げられ、この節の終わりに、なぜか再びケナズの名が現れる。これらの混乱はおそらく、異なる氏族に由来する複数の系譜が一つにされていることに起因すると考えられる⁵⁰⁾。

いずれにせよ、オトニエルは、南方のユダの山地に定住し、後にユダ部族に組み入れられた氏族の名祖であった。「申命記史家」は、キルヤト・セフェル奪取の挿話で有名なユダ出身の戦士であったオトニエルを、イスラエルを救った「士師」の列に加え、しかも彼によって「士師」時代を幕開けさせているのである。

e. オトニエルによる活動

オトニエルによる活動は、「起こし」―「救助」―「霊の付与」―「裁き」―「出陣と勝利」と

聖書箇所	イスラエルの敵	士師	出身地	抑圧期間	平穏期間
3:7-11	クシャン・リシュアタイム	オトニエル	——	8年	40年
3:12-30	エグロン	エフド	ベニヤミン	18年	80年
3:31	——	シャムガル	——	——	——
4:1-5:31	ヤビン	デボラ	——	20年	40年
6:1-8:35	ミディアン人	ギデオオン	マナセ	7年	40年
9:1-57	——	(アビメレク)	——	——	(3年)
10:1-2	——	トラ	イサカル	——	23年
10:3-5	——	ヤイル	ギレアド	——	22年
11:1-12:7	アンモン人	エフタ	ギレアド	18年	6年
12:8-10	——	イブツァン	ベツレヘム	——	7年
12:11-12	——	エロン	ゼブルン	——	10年
12:13-15	——	アブドン	エフライム	——	8年
13:1-16:31	ペリシテ人	サムソン	ダン	40年	20年
計				111年	299年

図表 4 士師たちの出身地と抑圧・平穏期間

いう順序で記述されている(3:9-10)。最初の「起こし」—「救助」の組み合わせは、綱領部分の2章16.18節の順序に則ったものである。『士師記』におけるヤハウェの霊は、軍事行動の開始や超人的な力の発揮を促す役割を担っており、「霊の付与」—「出陣と勝利」は、ギデオオン(6:34.35)、エフタ(11:29)、サムソン(14:19,15:14.15)の物語にも見て取れる流れである。彼がイスラエルを「裁いた」(עָשָׂה/špē)という注記は、3章9節の「救助者」(מֹשִׁיעַ/môšîaʿ)の語に対応する綱領部分の2章16節の「士師」(שֹׁפֵט/šōpē)という語を念頭に置きつつ、「士師」としてのオトニエルの活動を明確にするために加えられたものと思われる⁵¹⁾。

オトニエルの活動の特徴付ける、「彼の手は、クシャン・リシュアタイムに対して強かった」との表現(3:10)は、語根עָשָׂה/עָשָׂהを動詞として用いる稀有なものであるが⁵²⁾、ギデオオン物語を導入する6章2節で、「ミディアン人の手はイスラエルに対して強かった」と言われており⁵³⁾、この文言を、力関係を逆転させる形で取り入れたものと思われる。

以上の考察を踏まえると、最初の「士師」

オトニエル物語の背後に何らかの固有伝承を想定することは難しく、むしろ物語の全般が「申命記史家」自身の手によって組み立てられた仮構であると考えられる。

「申命記史家」は、『士師記』の中で一連の「士師」の活動についての描写を展開するに当たって、『ヨシヤ記』15章のカレブ伝承を参考にしつつ、そこに登場するオトニエルを利用した。その背後には、「士師」としてその名と活動について伝承されていた人物たちが、いずれも北イスラエルの諸部族出身であることを踏まえて(図表4参照)、ユダと関わりのある人物を、それも「士師」の筆頭として登場させようとする意図があった。そこには更に、ヨシヤの世代とは時代的な隔たりを前提とする「士師」時代にあって、ヨシヤと同世代のカレブの近親者を挙げることで、ヨシヤ時代からの連続性ならびに継承性を示唆する狙いがあるだろう。

おわりに

『士師記』3章7-11節のオトニエル物語は、その図式的な枠組みだけでなく、詳細に

についても「申命記史家」によって構成されたものである。「申命記史家」は、オトニエルを最初の「士師」とすることで、「士師」時代をユダ部族ならびにヨシュア時代と関連付けて幕開けさせている。

出典

- 図表 1 : Z. Meshel (Hg.), *Kuntillet 'Ajrud (Horvat Teman). An Iron Age II Religious Site on the Judah-Sinai Border*, Jerusalem 2012, 87, Fig. 5.24
 図表 2 : Ibid., 92, Fig. 5.35
 図表 3 : J. M. Hadley, *The Khirbet El-Qom Inscription*, VT 37 (1987), 52
 図表 4 : 筆者作成

注

- ¹⁾ 山吉智久『「彼らはヤハウェの目に悪を行った」—士師記の『循環的定式』—』、『北星論集』58 (1), 21ff 頁参照。
- ²⁾ *Biblia Hebraica Stuttgartensia*, Stuttgart 1990.
- ³⁾ B. Lindars, *Judges 1-5. A New Translation and Commentary*, Edinburgh 1995, 131; BHQ, *48 参照。
- ⁴⁾ 秦剛平訳『七十人訳ギリシア語聖書 士師記』青土社, 2019年, 40f 参照。
- ⁵⁾ 秦『士師記』, 40f 参照。
- ⁶⁾ BHQ *49 参照。
- ⁷⁾ 秦『士師記』, 40f 参照。
- ⁸⁾ W. Groß, *Richter* (HThK.AT), Freiburg u.a. 2009, 222 参照。
- ⁹⁾ U. Becker, *Richterzeit und Königtum. Redaktionsgeschichtliche Studien zum Richterbuch* (BZAW 192), Berlin 1990, 106 参照。
- ¹⁰⁾ G. von Rad, *Der Heilige Krieg im Alten Israel*, Göttingen 1951, 7ff [G. フォン・ラート『古代イスラエルにおける聖戦』山吉智久訳, 教文館, 2006年, 11ff 頁] 参照。
- ¹¹⁾ A. S. van der Woude, Art., 𐤒𐤓, in: *THAT I* (1994⁵), 670 参照。
- ¹²⁾ 秦『士師記』, 40f 参照。
- ¹³⁾ Groß, HThK.AT, 218 参照。
- ¹⁴⁾ J. P. Floß, *Jahwe dienen, Göttern dienen. terminologische, literarische und semantische Untersuchung einer theologischen Aussage zum Gottesverhältnis im Alten Testament* (BBB 45), Bonn 1975, 382 参照。
- ¹⁵⁾ H. Niehr, *Herrschen und Richten. Die Wurzel špt im Alten Orient und im Alten Testament* (fzb), Würzburg 1986, 153 参照。
- ¹⁶⁾ 山吉「循環的定式」, 28ff 頁参照。
- ¹⁷⁾ なお, サム上4:18 (エリ), 7:6, 15-17 (サムエル), 王下23:22 も参照。
- ¹⁸⁾ Becker, *Richterzeit*, 104; Lindars, *Judges*, 129; J. C. McCann, *Judges*, Interpretation, A Bible Commentary for Teaching and Preaching, Louisville 2002, 42 [J. C. マッカーン『現代聖書注解 士師記』山吉智久訳, 日本基督教団出版局, 2018年, 77頁]; A. Scherer, *Überlieferungen von Religion und Krieg. Exegetische und religionsgeschichtliche Untersuchungen zu Richter 3-8 und verwandten Texten* (WMANT 105), Neukirchen-Vluyn 2005, 27; Groß, HThK.AT, 218; 山吉「循環的定式」, 31 頁など参照。
- ¹⁹⁾ 語根 𐤒𐤓/škh の語義については, W. Schottroff, Art. 𐤒𐤓, in: *THAT I* (1995⁵), 898ff; H. D. Preuß, Art., 𐤒𐤓, in: *ThWAT VII* (1993), 1318ff など参照。
- ²⁰⁾ ホセ2:15, 4:6, 8:14, 13:6。
- ²¹⁾ エレ2:32, 13:25, 18:15, 20:11, 23:27.40。
- ²²⁾ 申4:9.23, 6:12, 8:11.14.19, 9:7, 25:19, 32:18, サム上12:9, 王下17:38。
- ²³⁾ Groß, HThK.AT, 219 参照。
- ²⁴⁾ Becker, *Richterzeit*, 105 参照。
- ²⁵⁾ アシエラについては, C. Frevel, *Aschera und der Ausschließlichkeitsanspruch YHWHs. Beiträge zu literarischen, religionsgeschichtlichen und ikonographischen Aspekten der Ascheradiskussion* (BBB 94), Bonn 1995; BHH 136f [『旧約新約聖書大事典』, 45f 頁]; NBL 184f; 山我哲雄『一神教の起源—旧約聖書の「神」はどこから来たのか』, 筑摩選書, 2013年, 187f 頁など参照。
- ²⁶⁾ GK²⁸ § 124 参照。
- ²⁷⁾ これはメソポタミアにおいても見られる現象で, *ištaru(m)* 「イシュタル」は, 特に複数形で「女神たち」を表し得た。D. O. Edzard, *Mesopotamien*, in: H. W. Haussig (Hg.), *Götter und Mythen im Vorderen Orient* (Wörterbuch der Mythologie 1), Stuttgart 1965, 82 参照。
- ²⁸⁾ Groß, HThK.AT, 219 参照。
- ²⁹⁾ Frevel, *Aschera*, 854ff; Scherer, *Überlieferungen*, 33ff; 山我『一神教』, 184ff 頁参照。
- ³⁰⁾ 碑文の翻字・翻訳については, Z. Meshel (Hg.), *Kuntillet 'Ajrud (Horvat Teman). An Iron Age II Religious Site on the Judah-Sinai Border*,

Jerusalem 2012, 87ff 参照。

³¹⁾ 碑文の翻字・翻訳については, J. M. Hadley, *The Khirbet El-Qom Inscription*, VT 37 (1987), 51ff 参照。

³²⁾ HAL 640; BHH 119 [『旧約新約聖書大事典』, 78] など参照。

³³⁾ 七十人訳では, Χουσαρσαθαιμ と一語に音写されている。

³⁴⁾ 王下19:9//イザ37:9, イザ11:11, 20:3-5, 43:3, 45:14, エゼ30:4,9, 詩68:32 など参照。

³⁵⁾ Groß, HThK.AT, 220 参照。

³⁶⁾ E. A. Knauf, *Richter* (ZBK.AT 7), Zürich 2016, 56 参照。

³⁷⁾ Groß, HThK.AT, 220; Knauf, ZBK.AT 7, 56 参照。

³⁸⁾ H. Hänsler, *Der historische Hintergrund von Ri 3,8-10*, *Bib* 11 (1930), 391ff; *Bib* 12 (1931), 3ff; A. Malamat, *Cushan Rishathaim and the Decline of the Near East around 1200 B.C.*, *JNES* 13 (1954), 231ff など参照。

³⁹⁾ Becker, *Richterzeit*, 106; Groß, HThK.AT, 220 など参照。

⁴⁰⁾ G. Ryckmans, *Les noms propres sud-sémitiques I*, Louvain 1934, 172 参照。

⁴¹⁾ H. B. Huffmon, *Amorite Personal Name in the Mari Texts*, Baltimore 1965, 206 参照。

⁴²⁾ AHw 335f 参照。

⁴³⁾ HAL 856; H. Rechenmacher, *Personennamen als theologische Aussagen. Die syntaktischen und semantischen Strukturen der satzhafte theophoren Personennamen in der hebräischen Bibel* (ATS 50), St. Ottilien 1997, 28f など参照。

⁴⁴⁾ 山吉智久「ヨシュアは二度死ぬー士師記の二重の始まりー」, 『聖書学論集』48 (2017年), 9f 参照。

⁴⁵⁾ 士1:11では, 「行った」。

⁴⁶⁾ 士1:13では, 「その内の小さい方」という文言が加わる (士3:9 参照)。

⁴⁷⁾ 用いられている動詞は, 本箇所では $\text{נָתַן}/ntn$ であるのに対し, 士1:15では $\text{יָהַב}/yhb$ * (創29:1, 30:1, 47:15, サム上14:41, 詩60:13, 108:13 など参照)。

⁴⁸⁾ 士1:15では, 「カレブ」。

⁴⁹⁾ Lindars, *Judges*, 128ff; Scherer, *Überlieferungen*, 29f; Groß, HThK.AT, 222 参照。

⁵⁰⁾ Groß, HThK.AT, 222 参照。

⁵¹⁾ Groß, HThK.AT, 222 参照。

⁵²⁾ 本箇所以外には, 士6:2, 詩9:20, 68:29, 89:14, ヨブ37:6, 箴8:28, コヘ7:19, ダニ11:12。頻繁に見られるのが, 形容詞の $\text{יָחַד}/yhd$ (94例, 半数近

くの44例が『詩編』に集中する)。

⁵³⁾ 7:11では更に, 別の動詞 $\text{חָזַק}/hzzq$ を用いて, ギデオンの「手は強くなる」と言われている。また, デボラーバラク物語の4:24には, 「イスラエルの子らの手は, カナンの王ヤビンの上にありますます堅くなった」($\text{חָזַק}/qsh$) という表現も見られる。